

地元関係者からの報告②

気仙沼市高齢介護課・気仙沼市地域包括支援センター*

自立に向けた支援を

保健師 村上 悦子

●未曾有の大震災... 寄り添い、寒さに耐えた長い夜

2011年3月11日14時46分、マグニチュード9.0の大地震があり、未曾有の大津波にみまわれました。

当時、私は職場にいました。いつもより揺れが大きく、書類棚が倒れてくるのではないかと抑えても、揺れの時間は長く、天井が落ちてこないかととても不安でした。地震がおさまり、ほっとしたとき、防災無線で「10mの津波が来る。避難してください。」とアナウンスがあり、市役所裏の高台に避難しました。震が散らつく寒い日であったことを記憶しています。その時は、1年前のチリ地震津波や大震災2日前の地震と津波で、沿岸養殖の若布や牡蠣の養殖施設に被害が出ていましたので、その程度の大きさかと思っていました。

しかし、市役所前の幹線道路伝いに黒い海水とともに音を立ててが押し寄せ、私の職場である地域包括支援センターは水没し、庁用車も流出してしまいました。

地震直後、市役所への避難者はいませんでした。時間が経つにつれ、被災した多くの市民が濡れた体で人々が避難してきました。庁舎を開放して受け入れに努めましたが、着替え用の衣類はなく、バスタオルや毛布で体を包む程度のことしかできませんでした。

ライフラインや交通・通信網が寸断され、被害の程度や災害規模そのものが把握できないまま、市役所の保健師・看護師は指定避難所に救護・支援のため配置されました。幹線道路は瓦礫により寸断され、配備を命じられた私たちは、津波を逃れた出先職場の車に乗り合わせ、車が入れない場所には徒歩で、倒壊した建物や黒煙が上がり燃え盛る火災現場を横目に進んで行きました。

一次指定避難所では、怪我をした方の手当を行いました。着の身着のまま避難してくる方に対しては、備蓄されている毛布などを配付し、市民

の好意で持ち込まれた毛布などもを数人で掛け合い、寒さに震えながら、長い夜を、朝が来るのを待ち続けるしかありませんでした。そのような厳しい環境の中、避難所までたどり着いていながら寒さで亡くなった方もいました。

乳幼児のオムツやミルクも少なく、避難者同士で分け合い、助け合いながら過ごしました。ある避難所では、有志のボランティアによるおにぎりや衣類、毛布などの提供があったと聞いています。

翌朝、大津波で被災した街の状況を目の当たりにしたときの、その衝撃は今でも忘れることはできません。市街地全体が瓦礫と化し、空一面の黒煙はオレンジ色に染まり、先が見えない恐怖と悲しみに襲われました。

ライフラインの復旧は遅々として進まず、数日後避難所に自家発電機は入りましたが、燃料が不足しているため夜の数時間のみ計画可動させ、上水道も出ないため水洗トイレの機能が果たせず、手洗いの環境は不衛生で最悪な状況となりました。

また、避難所は高齢者が多く、掛かり付けの病院から処方されている薬が流され不安になっている方も多くいましたが、医療機関に行くすべもなく、焦りと絶望感が漂う中、私たちにはどうすることもできませんでした。

●避難所の巡回診療開始

震災後4日目の3月15日になって、避難者を病院搬送が必要な方と薬だけの方に分けている人がいたため、確認したところ、DMAT（災害医療派遣チーム）と知りました。

DMATの支援によって薬が入手でき、DMATの医師と市内の開業医（自らも被災されていました）が避難所を巡回・診察をするようになり、避難所の医療問題は少しずつ解決していきました。

しかし、自宅に留まっている方は病院に行きたくても病院が被災し、道路が寸断され、ガソリンも不足するなど、通院できない状況でした。妊婦

さんが避難所に来て「お腹が張って、いつ病院に行くようになるか不安なんです。夫も仕事でいないし、電話も通じない。自分の子ども二人を津波で亡くしたため、避難所にいる子どもの声が辛く、避難所にはいられない」と、涙ながらに相談されました。万が一の時には近所の方の協力と、東京消防庁の協力をもらえるようにしました。

在宅の方に DMAT が避難所に来る日を連絡したくても、来所が不定期であり、通信網が寸断されているなか、周知することができませんでした。それが、3月21日に避難所に医療救護所が15カ所設置され、地域の方でも医療救護所まで来られる方は診察してもらえるようになりました。

しかし、要介護者や身障者の方が医療救護所まで通所できるわけではなく、その健康状態、生活状況を気にしながら、避難所から職場に戻りました。

●介護保険関連施設の被災と支援データの喪失

職場に戻り、はじめて避難所105カ所、被災者2万人にも及ぶ避難者がいる実態に直面し、さらに市内開業医の8割が被災し、介護保険サービス事業所も数多く被災していることを知りました。市の高齢介護課やケアマネジャー、ヘルパーステーション、訪問看護ステーション等が同時にのほとんどが被災したため、データを喪失し、在宅高齢者の安否確認が大きな課題になりました。

●巡回療養支援隊「JRS」の結成

気仙沼市立病院の横山医師は、孤立した地域を歩いて廻り、地域で介護が十分に受けられずにいる方が多くいることから、在宅支援を進めるため、3月25日「気仙沼巡回療養支援隊(JRS) (以下、JRS)」を結成しました。その設立に参画していたのが横山先生をはじめ、市内で開業していた気仙沼市医師会の村岡先生、DMATで支援に来市した愛媛県「たんぼぼクリニック」の永井先生と宮城大学、シェアです。それが私たちの出会いでした。

JRSの目的は、在宅の要介護者の支援ができるように、保健師等により巡回訪問を実施し、安心して定期治療につなげることでした。

医師・看護師等による「巡回診療班」と保健師・看護師等による「巡回健康相談班」のチームを作

り、全国からの支援者も加わって、毎朝・夕のミーティングをしながら訪問を開始しました。在宅の要介護者や障害者の方の中には、電動ベッドやエアマットがライフラインの寸断によって動かなくなり、褥瘡の発症が多くみられました。「巡回診療班」が治療に奔走し、「健康相談班」は実態把握のため市内随所をローラー作戦で実訪問を進めました。

●全国から支援の手

全国からさまざまな職種の支援者が集まるなか、調整役が必要となり、地域包括支援センターで担えないかと言われました。同じ県や市・町からの支援者同士が、支援内容を宿泊先や現場できちんと伝達していることもありましたが、ほとんどの方は、その場で指示を仰ぎながら訪問活動をしていました。

地域事情が分かる気仙沼市の職員が地図の準備や、支援者へのオリエンテーション、訪問後の報告など、調整を担わなければいけないことは十分わかっていましたが、年度末の時期で現場職員の退職もあり、また、道路の寸断により移動がままならない中で、職員の常駐は大変難しい状況でした。そんな時、シェアが調整役を引き受けていただいたことには、本当に頭が下がる思いがいたしました。

震災直後で被災者をどう支援して行ったらよいか全くは先が見えない状況であったところ、全国からの支援により、在宅の方に医師による治療ができ、低反発マットやベッドなどの介護物資の手配ができました。また、ひとり暮らし高齢者宅に親戚が避難しているケースなど、健康・生活状況の確認が進められ、支援が必要な方を早期発見・対応でき、やっと市内の状況が見えるようになりました。

もともと気仙沼市は、岩手県に隣接した県北エリアであり、公共交通の便も悪く、小児精神科医師や臨床心理士等の専門医療に受診することは難しかったのですが、全国から多種多様の支援を受けることができ、支援の幅の広さに驚くとともに、感謝の思いでいっぱいです。

●「与える支援」から、「自立できる支援」へ

この震災を契機として、市立病院や市内の開業医、介護保険サービス事業所、気仙沼市、宮城県関係者などが一堂に地域の医療や保健福祉を考える機会ができ、連携しやすくなりました。

反面、避難所や在宅で定期的に治療を無料で受けられるため、病院や介護保険サービス事業所等が再開しても、市民が今までの治療・サービス利用に戻る時期が遅れたことも事実です。これでは、本来の地域の復興が遠ざかるのでないかと不安になりました。支援を受けている私たちからは言えなかったのですが、そのことを懸念し、JRSやDMATのミーティングの中で提案し、市民への診療や介護を地域の病院や介護保険サービス事業所につなげるようにしてくれたのがシェアでした。

支援者の専門職の方の中には、気仙沼のやり方は稚拙に見えたこともあったようです。いろいろなアドバイスをいただくのですが、現状には遠く、受け入れることができず、責め立てられているように感じたことも多々ありました。それでも、私たちの状況を理解していただき支えてくださる方も多く、現状に適したアドバイスにより本市の保健福祉業務が進められ、今に至っております。

東日本大震災前の気仙沼市の人口は、平成 23 年 1 月末現在 74,303 人でした。その 1 年後の平成 24 年 1 月末では 70,056 人になりました。

亡くなった方は 1,041 人（平成 26 年 1 月 15 日現在）で、今もなお 236 人の行方不明者がいます。そして現住所を気仙沼においたままで、他県や他の市町村に避難している方も多くいます。まだまだ、震災の影響はありますが、生活の再建や産業基盤の復興が進められると同時に、安心して暮らせる気仙沼の再生に向けて努力して参りたいと考えております。

そして、もう一歩前に踏み出して、震災直後の「与える支援」から、徐々に被災者や市民が「自立できる支援」をしていかなければならないと感じました。

*当時。現職：市民健康管理センター「すこやか」
内 保健福祉部健康増進課 健康増進係